

2012年 8月27日・河北新報「読書・文化」欄では

岩手の俳人・歌人列伝集

鬼古里の賦 川村杳平 著

岩手県内の代表的な俳人や歌人を取り上げ、約600ページにわたって作家論を展開した大著。同県の短歌、俳句界の歴史や、岩手に根を下ろした俳人や歌人の業績を再認識する上でも貴重な一冊だ。

「鬼古里」とは盛岡近郊の地名。岩手には鬼にまつわる逸話や文学が多く、地名が印象的なことなどから、書名にしたという。

4章で構成。2章では「北の俳人列伝」と題し、角川俳句賞を受賞し、35歳で急逝した山崎和賀流や、俳誌「青嶺」主宰の木附沢麦青さん、岩手の俳壇の重鎮である小原啄葉さんら12人の作品の魅力を浮き彫りにしている。

いずれも作品を引用しつつ、作風や作者の創作に対する意識の変遷などを分析。木附沢さんについては「古里を浄土として見据える眼」、小原さんに関しては「風狂の境地」などをキーワードに据えている。

3章の「北の歌人列伝」では、柏崎驍二、小笠原和幸、田江岑子の3氏を取り上げている。〈逢へざれば棘みつる胸にまぼろしを蒼く透くまでいだきてねむる〉など、激しい恋情を短歌に昇華した田江さんを、「国宝級の歌の刀匠」とたたえている。

4章には、俳誌「樹氷」主催の白濱一羊さんとの対談を収録した。白濱さんは「俳句は認識の文学である」と強調。東日本大震災に絡み、季語の使い方や震災詠をどう詠むのかという課題にも言及している。

著者は1949年宇都宮生まれ。岩手県の文化や風土にひかれて盛岡市に移り住んだ。俳人協会会員。俳誌「古志」「草笛」同人。

と紹介されています。